The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Jean-Hugues Barthélémy, ”Simondon ou L’encyclopédisme Génétique”, PUF, 2008
Author(s)	橘, 真一
Citation	年報人間科学. 2009, 30, p. 223-228
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Jean-Hugues Barthélémy
“ Simondon ou L’encyclopédisme Génétique ”
2008 , PUF

橘　真一

はじめに

『シモンドン、あるいは発生的百科全書主義』。これが著者ジャン＝ユーグ・バルテレミーがこの書につけた、それ自身いささか難解なタイトルである。encyclopédie（百科全書、生き字引き）でも encyclopédique（博学な）でも encyclopédiste（百科事典編纂者）でもない。発生的百科全書主義というお初にお目にかかるこの語は同時にしかし、本書で取り扱われるジルベール・シモンドン（1924-89）というフランスの哲学者が抱えもつ謎の象徴でもある。一体シモンドンとは何者なのか。フランス現代思想を志している研究者にとって、少なからず謎でありつづけているこの問いに、本書は導きの糸を一縷もたらすものである。

著者バルテレミーは科学認識論と科学技術史の博士号をパリ第７ドゥニ・ディドロ大学で取得、他の著作として Penser l'individuation : Simondon et la philosophie de la nature (2005 , L'Harmattan) , Penser la connaissance et la technique aprés Simondon (2005 , L'Harmattan)をももつ、シモンドンを専門的に研究する世界に稀なる学者である。本書は二〇〇八年五月刊行という、現状における著者の最新刊である。が、フランスでは、著者以外の書き手によって、今秋さらに二冊のシモンドン研究書が発刊されるなど、研究の機運は盛り上がりを見せているところである。

ここでやはり、当のシモンドンについて若干の紹介が必要だろう。

言うまでもなく、日本においてシモンドンは第一に、ジル・ドゥルーズの思想に多大な影響を与えた同時代人の一人という仕方で紹介されてきた。実際、フランスにおいても、長らくドゥルーズと社会学者のジョルジュ・フリードマンしか援用しないようなマイナーな哲学者でありつづけたという証言もある。i事実、主著であり、国家博士副論文である『技術的対象の存在様態について』(1958)の知名度に比して、国家博士主論文の前半部をなす『個体とその物理的・生物的発生』(1964)、並びに後半部をなす『心的・集団的個体化』(1989)の知名度は低い。それぞれ同じく一九五八年の論文審査を受けていながら、その出版たるや、副論文の出版から六年後に主論文前半部の出版、さらにそこから何と二五年の歳月を要して、主論文後半部が出版されるという待遇をみても、シモンドンの業績が世に出るまでの困難が窺い知れる。しかし、ほかならぬドゥルーズ研究者は長らくもシモンドンの名を気にかけつづけてきたし、近年ではベルナール・スティグレールが大々的にシモンドンを称揚しつづけていることに対応するように、研究熱が高まりをみせている。本書はそうした潮流のなか生まれた、最新の研究書である。

構成と内容

それでは順を追って本書の構成と内容をみていくことにしよう。序論「発生的百科全書主義――個体化の哲学」の冒頭は「われわれの時代は、一方では政治的イデオロギー、他方では科学認識を日常の言葉へ翻訳する可能性の瓦解を経験してきた」という導入である。そこでわれわれの時代が新たな啓蒙を求めているのなら、「まったくその名にふさわしい共‐知（*con*-science）の獲得を可能にする総合をもって、方向＝意味（sens）の危機を乗り越えるための新しい百科全書」を編み出す必要に駆られるのだが、バルテレミーは、その必要への応答がシモンドンの壮大な哲学プロジェクトの核心そのものであるという。ii

つづけて「シモンドンの百科全書主義とは発生的百科全書主義であり、彼における個体化の概念は発生を意味する」iiiところ、「個体化（individuation）は、単に分化する個性化（individ*ual*i*sat*ion）であるだけではなく、まず発生の普遍的過程でもある」ivというのだが、これは一読してわかりにくい。つまりこういうことである。個体を普遍的「本質」や型として定義した場合、発生は個体に対して単独にあらわれる「内的」なものとなる。これに対して、個体にとって「外的」な発生とは、「分化する」関係より実はもっと本質的な関係である。v バルテレミーはこの点にシモンドンからの引用を継ぎ足している。

> 存在物の正真正銘の固有性は、その発生のレベルに、そしてその原因自身に対する、他の存在物との関係のレベルにある。vi

つまりは、こうして「内的」発生と「外的」発生を統一的に捉え、それらに互換性をみるシモンドンの個体化論は、第一章『関係の実

在論』――科学認識論的前提条件」において示されるように、ガストン・バシュラールのいう「関係」を、その理論的素地に敷いている。バルテレミーが「シモンドンはバシュラールのこの考えを延長しているにすぎない」というバシュラールの言を引こう。

> 初めに関係がある。すべての実在論は関係の表現様態でしかない。ひとは物体の世界を二度考えることはできない――まず物体間の相対として、それから各々対自的実在として……。vii

すなわち、シモンドンが「個体化はまず発生の普遍的過程でもある」と言うのは、「個体化と関係は不可分である。関係の力は存在の一部をなして、その限界の規定と定義の内に収まりゆく。個体と、関係の個体活動のあいだに境界はない。関係は存在に同時的である」viii という意味合いにおいてなのである。シモンドンにおいては、個体はそれ自体すでに関係であり、単に関係の中にあるというものではないのである。ここに例示として挙げられるのは、相対性、熱力学、量子力学といった、物理学的図式となる。

そうした物理学的図式に礎を与える第一哲学、つまり形而上学の主要な源泉として、シモンドンにおいてはベルクソンの名を挙げることができるだろう。とりわけ第二章「自然の哲学と知の統一」で取り出されるのは、ベルクソンが提示してみせたような統一の問題である。第一章における、関係の実在論の科学認識論を存在論的に一般化するには、権利上一つの目的＝終末（*telos*）がなければならない。〈存在〉と〈生成〉のあいだの対立を超過して、統一がなされていなければならない。このことはフッサールの言う、多様な領域的存在論にもあてはまる。すなわち、唯一の学知など存在せず、あるのは諸学問の歩みのみであるから、統一的な〈知〉は、必然的に類推的な思考様態をとらねばならない。ix

そうした意味において、シモンドンは正に類推によって諸学の統一を思考する者である。物理的、生命的、心理‐社会的「個体化領域」間の類推の全ては、存在者の発生とその発生の思考自身とのあいだの、心的で反省的な類推を方法論的土台とする。x

こうして、前提と基礎を踏まえた上で、いよいよ第三章「個体とその物理的・生物的発生」においてシモンドンの発生的百科全書主義なるものの内容が述べられる。ここからの展開は実に目まぐるしい。その全てをここで追おうとすると、相当な紙幅を要するのは必須であるため、ここでは転導（transduction）というキーワードを中心として第三章の紹介にかえる。

転導は論理的帰結プロセスであり、「知の領域において、帰納的でも演繹的でもない転導的な、発明の実際の歩みを定義するものである」。転導はまた、還元主義なくしてある状態からまた別の状態への移行を可能にするところの自己複雑化可能性（*autocomplexifiable*）ゆえ、普遍的図式である。xi

これは具体的にはどういう事態を指しているのか。有名な、結晶化を例にとってみよう。結晶化は、準安定状態から起こる結晶の母‐溶液の過融解状態をのみ起点とすることができる。結晶化は、前

-生命的にも前-物理的にも、前-個体的ポテンシャルの現実化である。xii

便宜のため即座に、以上のことをまとめていうならば、溶液の段階では結晶は現実化していない。あるのは結晶化のポテンシャル・エネルギーである。そこで、結晶化したあとの結晶と、その結晶が産出されたところの溶液を比べてみるならば、帰納的にか、演繹的にか、一見因果関係が見出せそうな気がする。しかしそのプロセスをマクロにせよミクロにせよ物理学的に辿ったところで、結晶化が、帰納や演繹のプロセスであるというのは正確ではない。なぜなら、溶液と結晶とでは、まったく別のものだからである。明らかにそこには発明的な飛躍がともなわれてあり、転導という言葉がそもそも心理学で「推論が個別な事例の繰り返しに終わり、全体としての統一、意味を欠く」xiii 意であることからしても、自己複雑化が普遍的図式たりうるという言明の理由は窺い知れよう。

ところでなぜ、個体化の前と後は、同じではないといえるのであろうか。もし論理的に同じではないといえる何かがないとすれば、個体化の前と後は物理的に、ミクロには量子の理論に、マクロには熱力学に解消され、あるいは同じであるとされるだろう。したがって、個体化の前と後では同じではない何かとして導入されているものがある。それは情報という概念である。

すると、「個体化の公式」xiv としての情報は、物理的、生命的のみならず、心理-社会的個体化領域へも適用可能であるはずである。第四章「超個体という問題」では、そうしたテーゼをもって、超個体性という強固な難問へと立ち向かう。

まず、「超個体性は全ての宗教的背景に先行し、全ての宗教的力の共通基盤であり、宗教となって現れるものである」xv というシモンドンの立場が確認される。バルテレミーはシモンドンが超個体性について述べる他の箇所も対照して、超個体は間-個体ではなく、一挙に与えられた自己超越的な（*autotranscendante*）実在であると、整理する。xvi つまり、ここに到ってもバシュラールのいう関係が通底している。また、間-個体ではないというときには、転導も効いてくる。たとえば、集団が個体に影響を及ぼすとは言えない。そうした作用は個体の生と同時的であり、個体の生と独立ではないからである。個体化が転導的なものであるなら、集団の個体化も転導的なものなのである。

ここで、やはり人格化（personali*sation*）という難解極まりない用語に触れないわけにはいかないだろう。ここにこそ、シモンドンが、いや個体化論が突きあたらなければならない巨大な壁があるからである。シモンドンは物理的、生物的な個体化（individuation）と心的、集団的な個性化（individualisation）と用語を使い分ける。そこにきて、人格化はそれらとセットで論じられることになる、個体化の最終局面である。

人格（personalité）は、実現された心的なものと実在の集団的なものとの不可分性を意味するところのものである。xvii この不可分性について、シモンドンの言葉を引こう。

超個体は個体から個体へといったように個体の内を通り抜ける。個々人の人格は集落や専門組織によってではなく、被覆（recouvrement）によって集合的に構成される。xviii

ここで、被覆によって定義される人格とは、再三繰り返している通り、「関係」そのものである。このように、シモンドンの定義する個体とは、その最初も最後も「関係」であるようなものなのである。

そして最後に、第五章「技術的個体への移行」では、ふたたび統一の問題が扱われる。つまり、統一がもたらされるためには、発散に対する収束が要されるわけだが、もし発明というものが際限無しの多様化を意味するのであれば、事態は収束をみないのではないかということである。

これに対する一つの応答は、ヘーゲルの具体化（concrétisation）を用いたものである。すなわち、「技術的対象の発生はここでは改善（*perfectionnement*）という語で理解される。」xix 初めから具体的な自然的対象に対して、抽象的な技術的対象は具体化を目指しながらも結局具体にはなれず、ただ近似がもたらされつづけるだけであるため、やはり統一は統一でありつづけるというわけである。これで本書の内容を一巡りしたことと思う。以上で本論の内容と構成についての紹介を終える。

おわりに

ここまでみてきたように、シモンドンにおいて、哲学、心理学、物理学、生物学、工学などなどの知見を散りばめながら展開されているのは、ほかならぬエドガー・モランが唱道したような人間科学である。いみじくもバルテレミーは「シモンドンの発生的百科全書主義は、同時に先触れであり複雑化である、完全な未来、エドガー・モランによって主張された該博な複雑性であるように思われる」xx と述べている。それはまた「最も大雑把である哲学的抽象と博学かつ根拠ある科学的情報を調和させ」xxi もする。

バルテレミーが「発生的百科全書主義から引き継がれた」結論の最後で述べているように、シモンドンの発生的百科全書主義はそれ自体、自己超越的である。xxii 情報化革命が一過して、なお混迷を極める時代にあって、これから要される思想は、こうした、それ自体生命的な構造をもった、自生的な思想なのではないだろうか。

参考文献

i Pascal Chabot , *La philosophie de Simondon* , Vrin , 2003 , p.8
ii *Simondon ou l'encyclopédisme génétique*［以下 EG］, p.1
iii *ibid*.,p.4
iv *ibid*.,pp.4-5
v *ibid*.,p.5
vi Gilbert Simondon , *L'individuation à la lumière des notions de forme et*

d'information〔以下ILFI〕, Millon , 2005 , p.90

vii Gaston Bachelard ,*La Valeur inductive de relativité* , Vrin , 1929 , p.208

viii ILFI, p.143

ix EG, pp.35-37

x *ibid.*, p.37

xi *ibid.*, pp.62-63

xii *ibid.*, p.63

xiii『ロベール仏和大辞典』(1988 , 小学館) p.2431

xiv ILFI, p.31

xv Gilbert Simondon , *L'individuation psychique et collective*〔以下IPC〕 , Aubier ,
1989 , p.155

xvi EG, p.93

xvii *ibid.*, p.107

xviii IPC, p.191

xix EG, p.127

xx *ibid.*, p.17

xxi *ibid.*

xxii *ibid.*, p.157